
最後の人造人間

灰色鼠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の人造人間

【Nコード】

N3544Y

【作者名】

灰色鼠

【あらすじ】

フラスコの中の人造人間騒動後のお話

プロローグ（前書き）

初投稿です。

拙い文章ですが、それでもいいよー、という心優しい方は下にスクロール！

プロローグ

くプロローグく

禍々しい光が月明かりが差す倉庫でほとばしる。

人体錬成。

それは死んだ人間を再びこの世に甦らそうとする錬金術の最大の禁忌。

人間という生き物はやるなどと言われるとやりたくなるものである。

だが、この人体錬成を行った術者は人を甦らそうという意図ではなかった。

部屋一帯に書かれた術式の上に小さな影が重苦しく落ちた。

「痛っ…たいなア。ど畜生が…」

比較的子供らしい高い声が倉庫に響き渡り、むくりと起き上がった。

肩から夥しい程の鮮血が冷たい床に爛れ落ちていく。

「あの野郎オ、色々持って行きやがって…」

突如、青い閃光が空を走った。

「さて…と、ここからどうすっかな…」

首を傾げた小さな影は、二つの紅い光を放っていた。

プロローグ（後書き）

出だしから中二病爆発ですね。

こんなかんじで続けていきますので、よろしくお願いします！

キャラ紹介（前書き）

オリキャラと登場人物についての紹介です

キャラ紹介

- …主人公…
- 限りなくオリキャラです
- 名前は後々出てきます
- 赤髪紅目
- 見た目は12歳くらい
- 腰に刀、着流し、常に裸足
- 真理に記憶と両腕を持って行かれました
- 何故かはまだ秘密
- イーストシティに出没します
- …ロイ・マスタング…
- イーストシティの東部司令部で准将やっています

…リザ・ホークアイ…

・上の准将さんの補佐をしています

…その他諸々…

多分後々出すつもりです

ざっとこんなかんじでほのぼの(?)と続けていきます!

プロローグの前書きにも書いた通り、初めての連載で右も左もわからない状態でやっていきますので、拙い文章を読んで頂ける心優しい方、想像豊かな作家様の作品をを横目に『最後の人造人間』を暖かく見守って下さいませ。

.

キャラ紹介（後書き）

このコメント何を書こうか戸惑います。
基本書きたいことが無いもんでして…。

次から物語が始まります！

第一話 始まりは朝（前書き）

第一話です！

短めかもしれませんが、楽しんで読んでいただいたらありがたいです。

第一話 始まりは朝

ある寒い日の朝。

青色の軍服を着た女性がある家の扉を叩く。

「お迎えに上がりました、マスタング准将。」

しばらくしてどこか気怠く扉が開き、寝癖のついた髪をばりばりと掻きむしりながら男の顔がひょっこりと覗いた。

ロイ・マスタング。

先日の軍部の内乱以降、大佐から准将に昇級した男である。

「准将、早く支度なさってください。今日も忙しいのですから。」

リザ・ホークアイ。

ロイ・マスタング准将の補佐であり、お目付け役。准将と同じく、軍部の内乱以降、中尉から大尉に昇級した女性である。

「大尉か。すまない、寝過ごした。すぐに支度するから待っていてくれ」

リザは軽く敬礼し、手を後ろに組んだ

「最近ちゃんと睡眠とられてないのでは？」

「全く、君には敵わないな。」

ロイは髪を掻き上げ、浅いため息をついた

「付き合いが長いので。司令部ではサボってばかりなのに、自宅で随分と熱心に仕事なさっているんですね。」

「ほんと、君には敵わない……」

的を射た言葉にロイはがっくりと項垂れるしかなかった。

「ま、いずれはしなければいけないことだ。イシュヴァール人の為にも、殲滅戦で傷付いた人々の為にも。」

先程、軍内の内乱と言ったがそれは表向きの話で、実際は中央に賢者の石を持つホムンクルスという人造人間、その人造人間に唆された中央軍と鋼の錬金術師、エドワード・エルリック等の国家錬金術師や北のブリッグス軍、ロイの部下達の戦いであった。

その戦いは革命軍の辛勝に終わった。ロイはその際に元国家錬金術師のドクター・マルコーにイシュヴァール人を助けると約束したのだ。

「そうですね。でもまだ先は長いのですから無理はなさらないてくださいね。」

「今日は随分と優しいんだな」

「無理をして体壊した挙げ句、休暇を取られても困りますので。」

「べつやら私の気のせいだったようだ。」

ロイは拗ねた小さい子供の様に口を尖らせた。

二人は東部司令部に着き、指令室の扉を開けた。二人が一番乗りだったように部屋には誰もいなかった。

「全く、何をやってるんだあいつらは。給料減らしてやろうか。」

深いため息をつき、いつも通り椅子に腰を掛けようとした時だった。ロイの顔色が変わった。

「准将、どうかなされたのですか？」

リザがロイに駆け寄り、目線の先の、机の下にあるものを捉えた。

「これは……！」

そこには、全身に血を付けた小さな少年が体を縮こませて横たわっていた。

第一話 始まりは朝（後書き）

うーん。

前書きも後書きも何を書けばよいのやら……

次話はちよつと話は進むかもです。

第二話 謎の少年（前書き）

第二話目で不定期投稿だな、と自分でも感じるこの頃です。

「文章下手じゃね？」

と思う方！

思うだけにしてください。

私にもわかってますので。

第二話 謎の少年

ロイと紅い髪の少年とただならぬ雰囲気で行き合っている。

「……何とか言ったらどうだね？」

「……」

〈数分前〉

「これは……！」

「……子供……だよな」

「……子供……ですね、かなり訳ありの」

少年はアメストリス国内では見慣れない黒の服装おしており、裸足で横たわっていた。

さらに二人を驚かしたことは、今は出血はしていないものの、上半身がべったりと血で赤く染め上げられて、少年の傍らには見た目に似合わない長い刀が置かれていた。

何故このような少年がここにいるのか、何かに追われここに逃げ込んできたのか、考える前に二人の体はすでに動いていた。

「大尉、この子をソファアに寝かせておいてくれ」

「了解しました」

リザはロイの机の下から少年を起こさないよう、そっと抱き上げると、ソファアに寝かせた。リザはその時、少年に対して違和感を覚えた

「これは預かっておいた方が良さそうだな」

ロイは少年の側に置いてあつた刀を持ち上げた。

「見慣れない服装だな。シンの子かもしれんな」

「だとしてもアメストリスに来る理由がありませんが」

そうこうしているうちにロイの部下が出勤してくる

「おはようございます……って誰ですか。これ」

ロイ達の次にやって来たのはホットドックをくわえ、軍服だらしく着ている男、ハイマンス・ブレダ。この男も人造人間との闘いで陰ながら活躍したのだ。

「知らん。私が知りたいくらいだ」

「まさか准将の子じゃないですよね」

ブレダが准将に疑いの目を向ける。

「な……！そんな事があるわけないだろう！……多分……」

「可能性はあるんですね」

「やかましい！」

そんな喧騒の中、起きたのか起こされたのか、少年がむくりと起き上がった。

「あ、起きた」

「よつやく起きたな。私の質問に答えてもら」

少年はロイを一瞥すると話も聞かず再度ソファーに寝転び、寝はじめた。

「寝るな!！」

ロイは質問を無視された事に腹を立てた。少年は眉間にしわを寄せ、不機嫌そうに起き上がった。

すかさずリザが少年の前にお茶を出す。

「しめんなさいね。うるさくて。良かったら飲んでね」

少年は目を丸くしてリザを見ると唇を横に引き結び、首を横に振った。

「そぞ。じゃあ、ここに置いておくわ」

リザはお茶をいれたカップをテーブルに置いた。

「すまない。私は子供の扱いは慣れていないのでね」

ロイはこう行った場面でもリザがいて良かったとつくづく思う。

「私は元国家錬金術師、国軍准将のロイ・マスタングだ。君の名前も教えてくれないかね？」

「……」

少年は品評するかのようにロイの全身を見る。その少年の紅い目は、ひどくくすんでいて、まるで魚の死んだ目のようだ。

黙ったままの少年が僅かに身じろぎすると、着流しの袖がするりと肩から滑り落ちた。

「な……！」

ロイは絶句した。なぜなら、少年の肩からあるはずのものが無かったのだ。切り傷もなければ、事故に遭った形跡もない。

「お前……、腕が……」

「……」

先程大尉が感じた違和感とはこれだった。お茶を受け取らなかったのもそのせいだ。一方少年はそれを忌ま忌ましげに見る様なことはなかった。

少年は両腕失つたらしく、垂れ下がった袖をなおせなかった。リザが気遣い、それをなおす。

「何があった」

「……」

「……何か言ったらどうだね？」

少年は一瞬何か考える様に空を見上げると、そのままテーブルの脚を軽く蹴った。その動作は不規則に行われ、けれどもリズム良く音が鳴らされた。

こん、と脚を蹴り終えた後に少年はふっと浅く息を吐き、立ち上がる。それと同時にロイも立ち上がった。

「行こう、大尉」

「は？何を言っているのですか!？」

「命令だ。黙ってついて来い。ブレダ、留守を頼む」

少年はロイのその言葉を聞くと、密かに口角を上げた。

「まあ、大尉がいるからいいんですけど、早く帰ってきてくださいね」

ロイはブレダとすれ違いざまにひらりと手を振った。

准将と大尉は少年に連れられるまま、街の人気の無い廃工場へ来ていた。

「准将」

リザはロイに耳打ちする。

「どうしてとですか？」

「さっきあの子は脚を蹴っていたらどう？あれはモールス信号なのだよ。『オレに興味が湧いたなら、ついて来い。錬金術師なら尚更な』とな」

「新手のテロでは？」

「可能性はあるかもしれんな。信号を出した理由がわからん」

少年が足を止めた。目的地に着いた様だ。少年が身を翻す。

「始めまして。オレはノワール・ホックス。不法侵入で殺さずにいさせてくれて礼を言っぜ」

これが少年の発した最初の言葉だった。ノワール・ホックスと名乗る少年は深々と頭を下げた。

「軍部と知って入って来たのかね？」

「まさか。寒いし、腹減ってたし、眠たかったから、適当に入っただけだ」

ノワールは肩をすくめ、鼻を鳴らした。

「警備の者がいたのにか？」

「警備？ははっ！そんな堂々と入るかよ」

「ほう。どうやって入ったのかわからんが、まずは君の出所を知ることが先だな」

ロイの目つきががらりと変わった途端、ノワールの表情が曇った。

「……わかんねェんだよなア。これだけはどう思い出そうとしても、記憶が途切れちまう」

ノワールの紅い瞳が澱んでいく。瞳の中に深い闇が広がっているよ

う。

「だけど、一っただけわかることがあるんだよなア。それが此処にあるわけだ」

ノワールが倉庫を横目でみる。二人の予想が徐々に悪い方へ向かう。

第二話 謎の少年（後書き）

主人公の

ノワール・ホックスは

ノワール…フランス語で黒。

ホックス…めっちゃ簡単に作りました。

第三話 ノワール（前書き）

今話は色々設定込み入ってます。

ちょっと長いかもしれませんが……

第三話 ノワール

「大尉、見張りを頼む」

「了解」

ロイはりざとの短いやり取りを終えると、古い金属扉を開けた。埃っぽい空気と共に、血生臭い湿った臭いが鼻の奥についた。

「人体錬成の陣か……！」

二人の悪い予想通りの光景が広がっていた。倉庫の中心には何者かの血溜まりが出来ていた。

「あまり驚いてねエな。もしかして、あんたも経験あるのかな？」

ノワールはその陣の中心に立ち、冷酷な笑みを浮かべてロイの顔を覗き込む。

「……。お前は何を錬成した？」

「オレはオレを錬成した。何の為かは忘れちゃった。なんせ代価にしたのは御察しの通りこの両腕と」

ノワールは自らの頭を見る様に上部を見た。

「『大部分の記憶』なわけで」

「……ノワール。自分自身を錬成するには、入口と出口が必要だろ
う？どうやって戻ってこれた？」

「大方、出口を錬成したんじゃないかねエの？」

ロイは曖昧なノワールの発言に呆れ、ため息をついた。

「何を覚えている？」

「自分自身の事が少々、錬金術、真理、…くらいかな？」

「ほう、親や住所は？」

「さあ？親はいたような、いなかったような……。住所はないからいないんじゃない？」

ロイは一層険しい顔になる。

「軍部で信号を使った理由は？お前は何者だ？」

「……言えねエな」

「何故だ」

「見ず知らずの奴に情報をほいほい教える程オレは馬鹿じゃねエし、お人好しじゃねエ。それに不公平だが。あんたは聞き、オレが答える。オレにメリツトが皆無じゃねエか」

ノワールは少し不機嫌になり反論する。確かに誰でもこのような尋問紛いを受けると、不機嫌になるものだ。

不意に扉の外で銃の安全装置を外す音がノワールとロイの耳に入る。

「どづした」

「いえ、何か気配を感じたので」

リザの言う通りで辺りは人一人いないのだが、どこか殺気じみたものが充滿している。

「中々勘が良いな。そうさ、この辺りは今の世の中のやり方が気に食わないテロリストの巣窟だぜ。奴サンはご丁寧に狙撃する気マンマンだ」

そういうノワールの目線の先には割れた窓ガラスの向こうから銃を向け、こちらの様子を伺っている。

「だが、我々を殺すには力不足だな。こちらには『鷹の目』と呼ばれた大尉がいるからな」

「へえ、あなたが『鷹の目』」

ノワールは二人に聞き取れない音量で呟いた。

「……で？あなたは何の錬金術使うんだ？」

ロイは右手をポケットから手を出す。すでにその手には錬成陣が書かれた手袋を装着している。そこに這っている火蜥蜴が生き生きと躍動感を醸し出している。

「久々にこの焰が使えるそうだ」

「いい歳してはしゃぎ過ぎないでくださいね」

「わかってるよ。大尉、援護を頼む」

「言われなくとも」

ロイとりげはノワールをよそにテロリスト鎮圧に走った。

「あーあ、置いてきぼりですか？」

二人の背中を見送ったノワールだったが、多数の背後の気配に振り向いた。

「まア、こっちも好きに暴れるとしますかね」

「よっ、と」

ノワールは腕のないハンデを背負ってるにも係わらず、大勢の大人達を伸していった。

「オラオラア！手応えのある奴アいねエかア！？」

「なんだ！？このガキ！化け物か！？」

ノワールの動きは見事なもので、男の首に脚でクリンチし、そのまま身体を捻って頸骨を折ったり、巧みに足払いや脚のみで投げ技を掛けたりするなど、戦術に長けていた。

「何押されてやがる！相手は子供だ！」

テロリストが次々に銃を構え、ノワールに発砲する。
ノワールは銃弾を避けるも、頭部に一発銃弾が貫いた。

ノワールの身体がぐらりと傾き、倒れるかとその場の皆がそう思った。が、ノワールの身体は脚で踏ん張り、倒れなかった。

「……いつてエな。一回死んじまったじゃねエか。」

ノワールの傷口から赤い閃光が迸ったかと思うと、すぐさま傷は塞がった。だが、それだけでは留まらず、ノワールの姿が変化していく。

「てめエらの冥土の土産にオレの本体見せてやる」

テロリストの前に現れたモノは、尖った耳に、頬まで裂けた口、吊り上がった目、風になびく金色の毛、極めつけは尻から生える九本の尻尾。

「化け物め……！」

熱を纏った巨大な狐だった。

第三話 ノワール（後書き）

あれ？

エンヴィーのパクリじゃね？

と思ったあなた！

後々少しだけ違ったりするかもしれないね。

第四話 焼け焦げた地面（前書き）

突然ですが、最近、小説執筆しているおかげなのか作文を書くのが早くなりました。

私、感想文書くのが苦手なんです……。。

第四話 焼け焦げた地面

「あらかた片付いたな」

「そうですね」

ロイは戦闘で乱れた襟を正す。

「他愛のない。運動不足の私にはもう少し粘って欲しかったのだがな」

ロイ達はテロリストを気絶までに止め、捕縛は応援の憲兵に任せた。

「准将、あの男の子は……？」

「しまった！！置いてきた！！」

「全くもう！だから無能なんですよ！」

二人は慌てて倉庫付近へ走った。テロリスト鎮圧という戦火の中、まだ幼い少年が無事いる訳がないのだ。

「無能は雨の日だけで充分なんですから！」

「上司を無能無能って君ね……」

「戦闘の中で子供一人置いていく人に無能以外に何か当てはまりますか！？」

「……ハイ。スミマセン……」

ノワールのもといた倉庫へ戻ってきたが倉庫の中にはノワールはおらなかった。

「手遅れですか……」

「いや、あれは何だ？」

ロイが目にしたのは、道の角からするりと伸びる、一本の尻尾の様な物であった。

リザは銃を構え、ロイは発火布をはめ直し、そこへ足を忍ばせる。

二人で息を合わせ飛び出すと、何事もなかった様な顔で佇み、こちらへ振り返っていた。

「あ、れ？」

「終わった？」

ノワールの前には気味が悪くなる程に何もなかった。

だが、壁は燃やした様に焦げ付き、地面には巨大な生き物の足跡が残っている。

「え？あ、ああ。お前は何ともないのか？」

「おかげさまで。で？禁忌を犯したオレを憲兵に突き出すのか？」

ロイはしばらく考え込む。

「いや、私がしばらく預かる。こんな多芸多才な奴をおめおめと憲兵に明け渡すのは味気無いのでね」

「知らねエよ？オレがこんな奴だっても」

ノワールは両手の人差し指を立て、頭に乗せる。

「私を舐めてもらっては困る。私も様々な奴と戦ってきたのだよ」

「あそ。じゃ、よろしく頼まア」

ノワールの飄々とした態度に拍子抜けする一同だった。

「……意外とあっさりなんだな。プライドとかないのかね？」

「住むところもねえし、その上、牢獄行きじゃなけりゃ食い尽くさないだろ。それが釣り糸に垂らされた餌だとわかっていても」

「よからう、ついて来い。ノワール」

「へーへー」

そうロイの後ろでけだるげに返事するノワールの冷たい笑みに気付くものは誰もいない。

第四話 焼け焦げた地面（後書き）

短かったですね。

すみません……> (|) <

第五話 一抹の夢（前書き）

ああ、

ついにこの時期が……

期末テスト！（、、）

勉強漬けの日々が再び。

今話ノワールの主観ありです。

第五話 一抹の夢

「……というわけでこいつは私が預かることになった」

指令室は静まり返った。一人の子供を指差し、突然そう宣言されて驚くなど言うのが無理な話である。

「あ、そうですか。とでも言えると思ってるんですかあ!？」

もちろん、人体錬成した等のことはふせてるので、傍から見ればただの連れ子にしか見えないわけで。

「結局、あんたの子かよ! 相手は誰ですか!？」

以上に食いつきがいい男、ジャン・ハボック少尉。

この男は人造人間との闘いで脊髄を損傷し、下半身不随になり、一

時軍から離れた。人造人間との闘いの後、ドクター・マルコーの持っていた賢者の石という、術法増幅器で回復した。現在は厳しいリハビリの末、松葉杖で移動が可能になった。

「ねえ、ボク。お母さんってどんな人？癖のある髪してるから、お母さんは天然パ……」

ノワールはその話し方、髪質のワードを聞いた瞬間、額に青筋を立て、ハボツクの顔面を足で蹴飛ばした。

「オイ、コラ。天パって言葉、二度とオレの前で使うな。天パの気持ちは短髪野郎にわかるかアア!!」

軍内では一切口をきかなかったはずなのに、天然パーマと言う言葉で一転し、指令室中に怒号が響いた。ノワールはぎりぎり歯を軋ませ、まだ収まりが効かずにロイに襟首を掴まれている。

「落ち着け、ノワール。……はあ、鋼のと同じだな。まったく……」

ロイは前髪をかき上げ、大きなため息をついた。

「ノワール、お前は今どうしたい」

「とりあえず、あの野郎をボコボコにしたい」

「いや、そういう事じゃなくて……」

「じゃあ……刀返せ。そんでもって寝たい」

「武器はダメだ。部屋なら……」

外を見ると日はまだ高い。

ロイはどうしたものかと考える。早退できればいいのだが、生憎、今日はやり溜めた書類が山の様に積み上がっているし、朝から指令部を出たため、それはできないのだ。

「隣の部屋を使うがいい。あれはほとんど私物みたいなものでね」

そう、指令室の隣はロイに調べ物がある時によく使う部屋で、その最中は一切の立ち入りを禁ずる為、普段から皆入るうとはしないのだ。

「鍵を……おっと、その腕じゃ無理だったな。すまない」

ノワールはぴくりと耳が動いた。ロイの物言いに腹を立てたらしい。舌打ちが派手に聞こえた。

「いい。自分で開けれ」

ノワールはずんずんとロイ達の前を横切ると、扉を蹴破り、廊下へと消えていった。

「怒っちゃいましたね。息子さん反抗期ですか？」

ハボツクは厭らしい笑みを浮かべ、ロイの脇腹をつついた。

「消し炭にされたいのか。貴様は」

「……すいませーん」

ノワールは指令室の隣の部屋の扉の前に立った。

しかし、扉を開けるための鍵を受け取らず、更にはノブを捻る腕も無い。

人気が無いのを確認した後、ノワールの足元から青い閃光が走った。それは扉を這い、ノブへ集まる。

閃光が止むと、ノワールは扉にもたれる。すると、なぜだか鍵が掛かっていたはずの扉がゆっくりと開いた。

同じように扉を閉めると、扉からかしゃりと金属音が聞こえた。

どうやら扉の仕組みを変えたらしい。

「はあ、人間ほど腹立つものはねえな」

ノワールは部屋を見渡す。

部屋には書類ばかりだが、錬金術に関する物だったり、何かのメモだったり、ロイの物だと思われる報告書の山が積み上がっていた。

ノワールは隠されている様に奥にしまい込んである報告書を見つけた。

「『約束の日』……ねえ」

ノワールは寝る気は毛頭なかった。この国のこと、権力者は誰なのかを知りたかったのだ。

ノワールはその書類を器用に足の指で引っ張り出すと、床に座り、読み耽った。

出ていけ！この化け物が！！

うるせエよ

お前、死にかけだな。

誰だ。この金髪ジジイ

人間卒業したんだ。おめでとう。ノワール。

懐かしいな。誰だっけ？

我らは死んでもこの事は忘れない！
神が必ずやお前に鉄槌を下すだろう！！

オレが何かしましたか？

等価交換だ。錬金術師

お前はあの時の……！

「……！！」

…夢かよ。紛らわしい。

しかし、随分懐かしい夢だったな。全く記憶に無いけど。
つか、寝るつもりなかったんだけど。

お疲れなのか？オレ。

ま、暗号化された書類は全部解読し終わって、惰眠でも貪ってたんだろ。

元大統領とその息子さんが人造人間……。こんな書類置いておいて

いいのか？

重大機密情報だろが。

お父様とやらは鋼の錬金術師エドワード・エルリックその他諸々が倒したと。

誰のパピーを倒したんだ？

人のお父さんに乱暴しちゃいけませんよ。全く。

とりあえずあの二人だ。

元国家錬金術師に鷹の目。

どえらい戦争で活躍した奴か……。

……どえらい戦争って何だっけ？

記憶持って行かれすぎだろ！

しかも、両腕無しって不便にも程があるわ！

もう一回人体錬成してやろうか！

話が反れた。

まずオレが此処にいる理由は、自分を知ること。
これただ一つだ。

多少はわかる。

オレは人間じゃなく、人造人間だということ。
人体錬成し、記憶と両腕を持って行かれた。

だけど、何の為に？

今のオレ現状は把握できる。だけど、過去の記憶が皆無に等しい。
自分の年齢、出身、親さえ知らない。

なぜ、オレは自分自身を錬成したのだろうか。

何の為に、都合の悪い情報を忘れ去りたかっただけなのか。

それを知る為に此処にいる。

良い目標だろうか？

それを見つげるまでオレは死なないし、死ねない。

……簡単に死ぬような身体ではないんだけど。

軍部に来たのはたまたまだったが、今は軍人に付いていれば何か得られるかと思ったのは当たりだな。

この『約束の日』が引っ掛かる。

後で問い質してやる。

第五話 一抹の夢（後書き）

テスト期間なのでUP率低下します。 m)
m

第六話 目的（前書き）

期末テスト終わったー！（ノ><ノ

後は点数の問題ですね（<―>）

うわーん（――）

相変わらず文章崩壊しています。しつこく承下させてませ。

第六話 目的

書類室の扉が叩かれたのは、ノワールが起きて随分と時間が経った後だった。

だが、ノワールは窓のない、空しく電球が垂れ下がっているこの部屋では、自分がどのくらい寝ていたのか、どのくらいこの部屋で資料を読み漁っていたのか、全く予想がつかなかった。

「ノワール、開けたまえ。私だ」

扉の向こうからくぐもった低い声が部屋の空気を揺らす。ロイだ。

ノワールは立ち上がると、扉にもたれ、ノブ部分に意識を集中させた。

扉は閃光を散らした後、ノブがあることを意に介さず開いた。

「何？」

廊下の窓から見える外の風景はもつすっきり暗くなっていて、街灯が点々と道に沿って点いている。

「何って、私の仕事片付いたから帰るのだが？」

「オレも行くのか？」

「仕方ないだろう。私が預かると言ったんだ。それに行く宛てがないだろう？」

ノワールは大袈裟にため息をついて見せた。

「あんな。誰に対してもそんな感じなのか？
オレがどこの馬の骨かも知らねエのに」

「ああ、そうだな。だから私の家でじっくり聞こうと思ってな」

ノワールの口の端が吊り上がる。
ノワールに対してもロイの家に行くのは好都合なのだ。

「丁度いい。オレも聞きたいことが山ほどあったとこだ」

ぱちんと明かりのスイッチの片側を起こす。暗闇に慣れてしまった
ノワールの目に光が刺す。

「うへえ、殺風景な部屋だな」

ロイの家は、生活に必要な最低限の物しか置いておらず、壁はコンクリートが剥き出しで、棚には薄く埃が乗っている。ソファで寝ているらしく、ベッドはない。屋内には、錬金術だったり、仕事の事であろう本やら紙やらが散乱しきっている。

まさに朝は仕事に出掛け、晩は家に帰って寝るだけの生活をこの部屋は物語っている。

「あんだ、此処に女の子呼んだことねエだろ。幻滅すること間違い無しだぜ」

「必要ないものはいらん」

「……あんだいくつよ？」

ノワールはさして興味はなかったが、生活感はなく、ましてや女のいた形跡のない部屋を見れば、聞きたくもなるものだ。

「事実上29だが」

「そりゃあ嫁さんいねエ訳だわ」

「ダチも呼べねー」と、ノワールはあらかさまに肩を竦めた。

「お前に心配される程でもない」

「いつでも出来るってか。余裕ぶってたら仕舞いには一人だぜ？」

「ノワール、お前いくつだ？」

ノワールの発言はどこか大人びていて、目に余るところがある。

「……………憶測で構わんよ」

ノワールは片眉を上げ、肩を上げて見せた。

「それも忘れたのか」

「……まあな、どうやらオレも今の必要の無い記憶は持ってかれたらしい」

しばらく気まずい空気が続いた。お互い核心を突きすぎて収拾がつかなくなってしまうのだ。

「まあいい、それは後で聞くとする。とりあえず、シャワー浴びて来い。服も用意してやるから、それを何とかしろ」

ノワールの着物は自らの血液らしい物がこびりつき、乾いて固まっていた。

「いいよ。これで」

「お前な。晩だったから良かったものの、昼間にその格好で出歩いてみる。目立つじゃあ済まされないぞ」

想像してみよう。

血塗りの少年が白昼堂々と街中を歩いて見たらどうなるだろうか。当然、道行く人々はそれを好奇の目を向けるであろう。その挙げ句、憲兵に職務質問を受け、最悪連行。

「ああ、そうだね。じゃあ、お言葉に甘えるわ」

ノワールは手をひらっと振ると、シャワールを探して奥へと消えた。

しかし、ノワールは何者だろうか。
自分を錬成し、代価は取られたものの、真理の扉一つで帰って来られるとは……

鋼の場合はアルフォンスとの精神の混線で出入り口が確保出来たから戻ってこれた。

だが、ノワールは単独で行った。

ノワールにも扉が二つあるのだろうか。

ということは、人体錬成を過去に一回多人数で行ったということだろうか。

本人はもう一つ錬成したと言っていたが、想像だろう。

私も不本意ながら扉を開けさせられた際に中身を見たが、あの膨大な情報の塊を錬成するなど不可能に近い。

まず、その抗生物質はなんだ？代価は？

謎が多過ぎる。

ばたん

奥から物音がした。
ノワールが出て来た。

「いや、でっけーよ。お子様の身長舐めてんの？」

ロイがノワールに貸した服は、ロイにしては小さいものの、大人サイズ。当然でかい。

ノワールは、だぼだぼのズボンの裾を引きずり、袖が無様に垂れ下がっている。

何故かノワールは不機嫌そうに眉を吊り上げながら歩いてきた。

「腕無しでよく着れたな」

「服なんざ慣れりゃ足だけで着れるわ！それより水だよ！どうやっ

「拭くんだよ！特に頭！」

服には水を吸ったであろう染みがそこら中についている。ノワールの赤い髪からは絶え間無く水が滴り落ちる。

「呼べば行ったのに……」

「呼んだよ！散々！だけど誰かさんは考え事して全く気付いてなかったけどな！」

ノワールは薄情者が！と叫びながら頭を振る。水をきった形跡のない髪から大量の水滴が四方に飛び散る。

「悪い悪い。拭いてやるから待ってる」

ロイはそれ程急ぐ様子もなくタオルを手に取り、わしわしと赤髪から水気を取っていく。

「心配りになってねエなあ。あんた女にはさりげない気遣いはお手の物だろ？」

「ほう？根拠はあるのか？」

「女の匂いが鼻に付くわ。オレ、五感は鋭い方だから」

「…………お前は犬か」

「あと、焔ひの匂い。あれがそうか？」

ノワールはロイが脱ぎ捨てた軍服の山に埋もれている発火布の手袋を一瞥する。

「私は少し前まで二つ名は『焔』だったのだよ」

「ほー。じゃあ焰の錬金術師か。……！」

ノワールの頭の中で何かが垣間見える。それは、微かな映像となつてノワールの中を馳せ巡った。

ほんと、大した男だわ。焰の大佐は。

焰？

あら？ノワールは知らなかったかしら？ロイ・マスタング大佐。
焰の錬金術師よ

「ロイ・マスタング……焰の錬金術師……」

「どうした？」

「……いや、何でもねエ」

ノワールが見たのは薄暗い空間の中で誰かと会話をしているものだった。

相手はわからない。

わかるのは大人の女の声だということのみ。

「ノワール、今の自分自身の事で何かわかるか？」

ロイは水分を吸いきってすっかり重くなったタオルをソファアの背に掛けた。

「わかっているのはオレがホ………ノワール・ホックスという『人間』で、錬金術はお手の物。年齢、出所、両親はわからない」

ノワールは自然と口から出かけた人造人間という言葉に辛うじて飲み込んだ。

「あと、オレは人体錬成したけど、人を甦らすことは不可能って知ってんぜ」

「甦らそうとしたことがあるのか」

「ねエよ。多分な。不可能な事をやっただって無理なモンは無理だ」

ロイはこの生まれて10年と少しの少年が錬金術に詳しいのか、不思議に思った。
それに人体錬成という禁忌まで成し得ている。
更に謎は深まるばかりだ。

「真理は見たか」

「ああ、見たぜ。えげつない情報量だ。おかげでこっぴどい事も出来るけどな。」

ノワールの話終わると同時に、ロイから借りている服の大きさを変え、自らの体のサイズに合わせた。

「な……！ノーモーションで術が発動したと！？」

「腕が無くたって術は発動するんだぜ。（ま、ノーモーションなのはまた別の理由があるんだけど）」

「ノーモーションってことは賢者の石か？いや、あれはもうないはずだ」

ロイは錬金術師特有の思考に耽る。

錬金術師という生き物はあらゆる可能性を求めるものなのだ。

ノワール思考に耽るロイに密かに口角を吊り上げる。

（一丁鎌ア掛けてみるか）

「なあ、もしオレがその賢者の石を持っているとしたら、あんたは
どうする？」

「ありえんな」

「『もし』だよ」

「無論、内乱や紛争で負傷した人々の治療に充てる」

ノワールは鳩が豆鉄砲を食らったように、きよとんとし、狂った様
に笑い出した。

「ははっ！それ本気か？錬金術師ってのはもっと自己中なモンかと
思っていたけどな。こりゃあオレの見当違いだったね」

「どづづいう意味だ」

「くくつ。まあまあ。あんた、狗でいるけど目標とか……野望とかあるわけ？」

「大總統になるのは随分と先になるだろうが、平和な世の中を作るのが目標かな？」

ロイはどこか遠くを見るように目を細める。

「よし、乗ってやるよ」

「は？」

「オレにも一枚噛ませろつってんだよ。協力してやる」

ノワールの顔が緩む中、未だに訳がわからず黙っているロイであった。

第六話 目的（後書き）

今回一気に三話投稿します！！o(^-^o
テスト期間中に密かに執筆してたり……（汗）

第七話 最後の人造人間（前書き）

今話のサブタイ、サブタイじゃないですね。（・・・）

メインになっちゃってます。（・・・）

七話にはあの有名なフンちゃんがちょろっとでます。

第七話 最後の人造人間

ノワールは殺風景な部屋の中、ソファアームにどっかりと踏ん反り返る。

「協力？君はまだ子供だろう？何をしようというのかね？」

「オレの目的はオレを知るためだ。そのためなら、あんたという方が都合がいいし、それにただの子供じゃねー」

「首の後ろ、見てみ」と、ノワールは身を翻す。

ロイは何の事か全く予想がつかないが、言われた通りにノワールの少し長い髪を避けてみる。

そこには尾を飲み込む蛇の入れ墨がそこに佇んでいた。

「ウロボロスの入れ墨！人造人間か！」

ホームンクルス

「御名答！オレは『最後の人造人間』だ。あ、だからといってあんたらを殺しに来た訳じゃないから。あくまでもオレの目的はオレを知るためだからな」

「勘違いすんなよ」と、ロイに釘を刺す。

「元は人間なのか？」

「知らねエよ。それが知りてエんだっつーの」

「では、『ノワール・ホックス』は偽名か？」

「半分本当で半分嘘だ。オレの名は『ノワール（黒）』だ」

紅い眼光がロイの視界で映える。ロイの目が紅い宝玉魅入られたかのように逸らせなくなった。

「さつき、あんたという方が都合がいいつつつたが、オレの正体、口外したらどうなるか。わかってんだらうなア」

ノワールから黒い殺気じみた何かが醸し出される。それは今まで相手にしてきた人造人間と大差ない。

「ああ、わかっている」

「そ。じゃあオレはあんたが出来ねエ事をし、あんたはオレの正体の詮索の協力。それ以外は口出しはしねエし、される事もねエ。これでもいいか？」

ノワールはロイに承諾の意を込め、視線を向ける。もうノワールから殺気は漏れていない。

「いいだろう。もし約束を破れば、全力でお前を潰す。いいな」

「おー。全然OKだぜ。一言はねえよ」

ふあっ、とノワールは欠伸を漏らすと重苦しい灰色の天井を仰いだ。

「んじゃ。早速、独身子持ち男の生活の為にリフォーム開始だな」

ノワールの周囲から青い光が走ったかと思うと同時に部屋の内装がみるみるうちに姿を変える。

「ふーい。これでどうかな？体、休めるぐらいは出来るだろ」

部屋は至って質素だが、寝具に、食器などを錬成し、壁一面には暖色系の壁紙が貼り付けられた。

「おお、これは有り難いな」

「気に入って頂けたようで何よりだ」

ノワールは新品同様になったソファアに横になると、瞼を伏せた。

「晩御飯はいらんのか？」

「必要ねー。その変わり……明日……聞きたい事があるから……よろしく……」

一通り話し終えるとノワールは寝息を立て、眠りについた。

ロイはノワールの無防備な寝顔に笑みが零れる。

「とても人造人間とは思えんな」

その人造人間にロイは毛布を掛けてやった。

ノワールは暗闇に立っていた。
光の射さない暗闇に。

「んあ？」

『立つ』という音が、
『いる』のが正しいだろう。

「おい、どこだ？」「」。何も見えねー」

『久しいな。ノワール』

地鳴りの様な声が闇にこだまする。

「あい？」

途端に視界が開け、辺りが伺えるようになる。

「見えなきゃよかった……」

ノワールが見てしまったものとは、延々と人型の魂が阿鼻叫喚する空間。常人はそれで気分が悪くなるぐらいだ。

その空間を割いて姿を現したのは八つの巨大な影。

それらは他の魂たちの物とは別物で、人の形を成さないものばかりであった。

「初めて会った気しねエ、っていうか、は？久しぶり？」

その中でも際立って大きいのは九本の尾の狐の姿を模したものだ。
た。

『ああ、そうさ。俺達はノワールと200年間の付き合いだからな』

「へえ、オレ結構年食ってたんだねエ」

『まあ、人造人間、だからな』

「フーこたアよ。あんたらは賢者の石か？」

『そう。ただの人間、と獣たちの生命エネルギーだな。それはそうと、お前、記憶喪失前に俺達と取引した話、覚えてるか？』

九尾の狐はノワールとの取り留めのない話しの中でも、苛立つ事も

なく淡々たる口調で話しを進める。

「あー。どっかでそんなことしたような、しなかったような……」

『全く。相変わらずいい加減だな。まあいい、それは身についているだろうから心配いらんな。では、ノワール、本題へ行こうか』

「
」

ノワールは眠りから覚め、勢い良く半身を起す。

(……?何の夢だったっけ?)

外を見れば、陽のやわらかい光が街を包み、小鳥が囀っている。

「良く眠れたかね?」

「ああ。安眠じゃなかったがな」

舌打ちを一つしたノワールは首を回す。頸椎の関節が鳴る音はつきりとロイにも聞こえた。

「私に聞きたいことがあるなら早く支度しろ。私の副官は遅刻とサボりに厳しいんだ」

ロイはリザに戦々恐々としているようで、若干トーンが高めである。

コンコンと扉を叩く音が聞こえると、急に焦り出すロイであった。

「まだか！？来てしまった出はないか！」

「おーおー。今行く。あ、そうだ。一つ忠告忘れてた」

ロイはいやらしく笑うノワールに不信感を覚えた。

「」

「いいだろう……！」

「うーす。姐ちゃん」

「おはよう。ノワール君」

リザは仕事の顔と打って変わった人受けのいい笑顔で軽く挨拶を交わす。

ノワールはリザの後ろで蠢く小さな影を見付けた。

「ん？犬……」

「私の愛犬よ。仕事場に連れていってるんだけど、今日はどうした

のかしら。何かに脅えてるみたい……」

「……。名前は？」

「『ブラックハヤテ号』よ」

「ブラッ……！」

リザのネーミングセンスに凍りつくノワールであった。

「……よろしく。ブ、ブラックハヤテ号」

ノワールがハヤテ号の頭を撫でようと、手を伸ばす。だが、ハヤテ号はそれを拒絶するかの様に歯を剥き、全身の毛を逆立てて吠える。

「ハヤテ号！めっ！」

リザが吠えるのを止めるよう、叱ってもハヤテ号はそれをやめようとはしない。

「あ、えーと……なんかごめん」

「ホント、今日はどうしたのかしら」

二人と一匹が争っている横で、ロイは直立不動の姿勢で立っている。

「……准将もどうしたのですか？朝からそんなに汗をかいて」

「い、いや。動物の本能って凄いな。って思った、だけ、だが……？」

「？」

ロイの謎の発言にリザは疑問に思った。

しかし、リザにはそれをゆっくり聞く間もなかった。

ハヤテ号は結局、はりざの厳しい躰（調教）により、一事収まりはつしたが、ノワールはハヤテ号に警戒されるはめになった。

第七話 最後の人造人間（後書き）

どうでしたか？（・・・；）

いや、支離滅裂なのは元より承知しています。（――）

次話更新はすぐにすると思います。

第八話 それぞれの魂（前書き）

というわけで、前話の更新から約5分で投稿という相変わらずの不

定期更新……（・・・）

ああ、（、）

何と言っことか。（T T）

第八話 それぞれの魂

「で？あれがこつで、こつなつて？」

「そつだ。あ、大尉。お茶を頼む」

「はい」

指令室で慌ただしくロイの部下たちが歩き回る。

その中でノワールはロイの側で座り、足を延ばしてくつろぐ。

「准将お。サボらんでくださいよお。また徹夜になりますよ」

その中でハボックは煙草を加え、書類の山と睨む。

「やかましい！黙って手を動かせ！」

「あーもう！話が進まねエよ！！おい、ハヤテ号！遊べ！」

青筋を立て、発狂したノワールはハヤテ号を追いかけ回す。
ハヤテ号はノワールの中を感じ取り、一定距離を置いて逃げ出す。

勿論、書類の紙々が散乱し、舞い散る。

事態が收拾が収まらなくなった頃、銃声が二つ、東方司令部に響き渡る。

一同はぴたりと動きを止め、その音の主を恐る恐る見遣る。

「ちょっと目を離せばすぐにこれ。皆さん、何を考えているのですか？」

そこには般若の如し表情で静かな怒りを表に出したりザが銃口から硝煙を吹かして立っていた。

「ノワール君？ハヤテ号？ここは公園じゃないのよ？」

「す、すいませーん」

ロイは書類のサインを続けながら、ちらりとノワールに一瞥をやる。

「まったく、ひやひやしたぞ」

ロイは側にくっついて腰を据えているノワールと密かに会話する。

「まだ許容範囲内だ。まだ……な」

「優しいんだな」

「オレが言ったのはもっと悪意のこもったやつだよ。それにあれは……さすがにオレが悪いかも」

「今の仕事が終わったら、外へ視察に行くのだが……来るか？」

「もちろんだ。それまで寝るから起こせよ？」

「わかった」

ノワールはロイの返事を確認すると、壁に持たれてすぐに寝息をたて眠った。

「よく寝ますね」

リザが書類の回収ついでにノワールの様子を見に来る。

「ああ、そうだな。どこかの錬金術師とそっくりだ」

「元気にしてるでしょうか？」

ロイは紙に走らせたペンから手を離し、そのまま両手を頭の後ろで組んだ。

ロイの体重を支える椅子の背もたれがぎしりと軋む。

「元気に決まってる。あの兄弟は。それに静かなのは性に合わないだろう」

「そうですね」

窓から漏れた金色の光があの子の二人の風采を思わせた。

「あと少しですよ。サボらないでくださいね」

リザの抑揚のない声音と共に手渡された紙束は、ロイの一気に不快度を増した。

「まだあるのかね……」

「これだけです。それが終わったら外へ視察なので」

ロイは横で口を開けて眠るノワールをちらりと見ると、書きかけの書類の上にぼつねんと転がったペンを握る。

「では、早く終わらせなければな」

「珍しいですね」

「未来を担う子供が来てるんだ。いいところを見せたくもなるだろう？」

「雨が降らなきゃいいですけど」

「君ね……」

平然と憎まれ口を叩くりザにロイは溜め息を吐いた。

「おい、コラ。出てこいよ」

ノワールは再び暗闇の中にいた。ノワールは九尾の狐を呼び出すため、闇に叫ぶ。

『何だまた来たのか』

闇から狐の影が現れる。相変わらずでかい。

「ざげんじゃねえよ。こっちは前に話した内容全く覚えてねえんだ
」よ

『ふむ、そうか。それは好都合だな』

「ふざけんな。何もわからんまま生きて行く気はねエぜ」

謎の空間の中、ノワールは住み慣れたわが家の様に寝そべる。

「てめえらの名前すら知らねエしな」

ノワールの紅い眼光が狐の影を映す。

『てめえら……ということとは俺達も指してんのか?』

ノワールの八方から下卑た笑いがこだまする。
以前に狐の側にいた他の七つの影だ。

『2000年生きててなーんも変わんねえな。あんたは』

「てめえらのおかげでな」

『余計な話はよせ《破壊デストロイ》』

『うるせーや。てめえは感情なさすぎなんだよ！』

影たちがあれやこれやと口論しだし、話が進まなくなる。

「うるせー！人の中で喧嘩するんじゃないねー！誰かまとめて名乗れや
」！」

『それもそうだな。俺は《冷血クルエル》、こっちのバカは《破壊デストロイ》、お前の後ろにいるやつが《忠義ローヤル》と《狂喜エクスタシー》』

『バカってなんだ。バカって』

デストロイと言う影はクルエル程、影が霽がかかったようにはつきりしない。

『で、基本常に喋らん奴らが《恐怖テラー》、《虚無エンプティ》、《孤独アローン》これら全て……いや、他の魂もお前の中の賢者の石だ』

ノワールはゆっくりと立ち上がり、魂たちを見渡す。

「……そうか。まだ生きてるんだな」

魂の全てが静かにノワールの方へ見る。誰も叫ばず、誰も泣かない。ノワールの言葉をみんな待っているのだ。

「護ってやるよ。あんたらを。誰も死なせねえ」

『やはり、お前は変わらないな。俺が唯一誇る人間。』
《以前のお前》
《に言われた通り俺達は力を貸そう》
『』

「…おい、……きる。…ノワール」

「ん？」

ノワール目覚めた頃には、日が真上を通っていた。
人々が街を行き交い、活気がつく頃だ。

「行くぞ」

「あい、わかった」

ロイは羽を伸ばす鳥の様に伸びをするノワールの表情が少し嬉々としていることに気が付いた。

「どうした？」

「いや、良い夢を見ただけだ」

ノワールは笑みを浮かべたまま、軽い足取りで部屋を出て行った。

第八話 それぞれの魂（後書き）

ノワールの中の賢者の石には個性的な奴らが、多いんですよ。

これからどうなるか楽しみにしてください。たら幸いです。

第九話 友（前書き）

一気に投稿し過ぎたかも知れません。（・・・）

でも、フラストレーション溜まりまくっていたので、それが一気に放出したんですね。＼（^^∴;）

今話ありえない事が起こります。

そこであの名言を！

『ありえない事はありえない！』

第九話 友

「うわー。モテモテだねー。准将サンはよオ」

街への視察は困難を喫していた。

一歩歩けば街の端から若い女性が黄色い声を上げて駆け寄ってくるのだ。

ロイもロイで、その女性の一人に声を掛けてはまた次の女性へと、次々に女性達を虜にしていく。

もちろん女性にとって邪魔な者は弾き出していき、すでにノワールはその状態であった。

「やれ英雄だ、やれ焔の准将だ、やかましいたらありゃあしねエ」

その蚊帳の外であるノワールとリザは、もはや神を崇める宗教団体のようになった集団を眺める。

「男に媚びて金をせしめるのがそんなに楽しいことかね。だからあ
あいう女は嫌いなんだ。補佐もクソもねエよ。なあ、大尉サン」

「昔はもつとマシだったのだけれど、今はこの国の英雄なのよね。
仕方ないわ」

人造人間が闊歩していた時代が終焉を迎え、正義を掲げた革命軍が
活躍すれば、ロイが英雄と言つ名が世に馳せる事がリザには目に見
えていたのだろう。

「『えーゆー』ねえ…」

リザはとても退屈そうにしゃがんでロイの様子を眺めるノワールの
横で姿勢正しく立つ。

「だけど、いいの？お仕事進まねエよ？」

「そうね、そろそろ勤務に戻らないと」

リザが愛用の拳銃ホルダーから取り出す。ノワールは後に退き、「また？」と脂汗をかく。

「おっと、怖い補佐官が呼んでるから私は行くよ。じゃあね」

「「「えー！！」「」」

女性達が驚きの声をあげる中、ノワールは目を丸くした。

ロイはこちらを見ていなかったのにも関わらず、リザが銃を手にしただけでロイはあっさりと切り上げて戻って来たのだ。銃声も上げずにだ。

「え？何で？え？」

「遊ぶのもほどほどにしてくださいね」

「ははは、すまないね」

ロイはノワールにしたり顔を向ける。一方ノワールは未だになぜなのかわかっていない。

「何で？何でだ？？」

「寄りたい所があるのだが、いいかね？」

リザは時期からしてロイが何をしたいのか容易に予想できた。
それでなのか、リザは要求に黙認した。

「あ？オレア別に構わねーよ」

「すまないね」

ロイは力無く笑うと、花屋の初老の女性に声をかける。

「ご婦人。花を一束くれるかな？」

「はいよ。何にする？恋人にプレゼントかい？」

「いや、ちょっと暮参りさ」

「はい、350セズ。お兄さん、あんまり気負っちゃいかんよ」

ロイは小銭をポケットから取り出すと、店員の女性に手渡した。

「努力するよ」

ロイはそのまま背中越しに手を振った。

ロイの歩く後ろでノワールは黙って着いていく。

着いた先は雑草などが丁寧に刈り取られ管理された墓地であった。

ロイは迷わずある墓石の前で立ち止まる。

だが、そこには先約があり、その石碑の前に若い女性と、その子供らしい幼子がいた。

「あら、マスタングさん。お久しぶりです」

「グレイシアじゃないか。元気にしてたかい？」

「ええ。おかげさまで」

「エリシアも大きくなったな」

「えへへ」

ロイはエリシアという子を高く持ち上げる。エリシアは小さな手の平を思い切り広げて喜んだ。

「もうすぐ一年になるんですね」

グレイシアがぼつりと言葉を落とす。それに呼応して、ロイもリザも気を落とし、マース・ヒューズと彫られた石碑を見る。

「ああ、早いな」

「色々、ありましたから……」

そう笑って見せるグレイシアの目には涙が溜まっていた。

「そうだな」

ロイは胸ポケットからヒューズと昔に撮った写真を取り出す。それをノワールは下から覗いていた。

「そちらの子は？」

グレイシアはロイの影に隠れていたノワールの存在に気が付いた。

「内戦で両親を失ったんでね。それで身寄りのないこの子を引き取ったんだよ」

「ノワール、です」

軽く頭を下げたノワールにグレイシアは、その目線に合わせて赤い髪に触れ、優しく撫でた。

「そう。よろしくね。ノワール君」

ノワールは恥ずかしそうに口を真一文字に引き結んだ。

「では、私はこれで」

「もう行くのか？」

「はい。あまり長居していると下から嫉妬して夫が出て来そうですから」

この状況で冗談を言えるグレイシアにロイは喉を鳴らして笑った。

「バイバイ」

エリシアは懸命に小さな手をロイ達に振り、またノワール以外のロイとリザもエリシアに手を振り返す。

双方の間に憂愁の風が哀しく吹き抜けた。

グレイシアとエリシアがいなくなってからもロイは、石碑の前に花を沿えてその場から一切動かない。

今にも心が折れそうなロイを支えるかの様にリザはその側に立つ。

「全く、二人揃ってなーに辛気臭い顔してるんだか」

ノワールはヒューズの墓石の裏側に持たれて、太陽が灰色の雲に隠れてしまった空を仰ぐ。

「お前には私の気持ちはわからんよ」

「ダチだろ？ だったらなおさらそんな顔で死者の前に現れるな。ヒューズだっけ？ よっぽど面倒見が良さそうだな。どうせ余計な事に首を突っ込んで……」

「黙れ、ノワール。お前に何がわかる。知ったような口を叩くな」

ロイの声が震えているのがわかる。それどころか、力が入った手でさえ震えている。

「だからこそだろ。面倒見が良いこいつだからこそ、そんな顔で来られると心配して逝けねーんだよー！」

ノワールが声を荒げる。今まで人の為に怒鳴った事などなかったはずだったのだ。

ぽつりぽつりと大粒の雨が降り、虚しい世界に濃い斑点をつけていく。

「ヒューズはもういないんだ！死んだ者は喋らない！お前がヒューズの偽りの代弁者をするな！」

ノワールが奥歯を音が鳴るほど噛み締める。だが、自分を落ち着かせるように長い息を吐くと、先程のような怒鳴り声を出す様子はない。

「『死人に口なし』。確かにな。だけど口がないことをいいことに、死者に自分の辛みを押し付けてるんじゃないかねエのか？わかってないのはあんただろ」

ノワールの辛辣な言葉は今のロイの胸に痛いぐらいに突き刺さった。

だが、その言葉はロイの奥底の暗きを照らし、緩解していく。

「……」

驟雨が止み、分厚い雲が太陽から外れかかった頃、ノワールはふらりふらりと立ち上がり、墓地から遠退いた。

「……准将」

リザは持参していたハンカチをロイに差し出した。

「……少し乱暴な言い方だが、また救われた気がするよ」

ロイもノワールの仕草を真似て、空を仰いだ。

「……もう雨は上がりましたか？」

「ああ、清々しい程、晴れた空だ」

まるでロイの言葉に答えるように、雲の切れ間から太陽の陽射しがヒューズの墓とロイに下りる。

優しく凪いだ風がロイの心の中に巣くっていた僅かな闇を拭い去っていくようだった。

「ヒューズさんよオ、あれでよかったのかね？」

ノワールは墓地を去り際に亡きヒューズに声を掛けた。

『ああ、ちよいと口は悪かったがな。これでロイもふっ切れる。あと、お前のプレゼント、気に入った。また来いよ。ロイと一緒に』

その声を聞いてか聞かずか、ノワールはふっ、と笑うと墓地を去った。

「准将、こんな所に彫刻なんてありましたっけ？」

ロイはりざの指差す、墓碑の裏側を見る。

そこには幸せそうな笑顔を浮かべて並ぶ、グレイシア、エリシア、ヒューズの姿。

その家族ともう一つ

ヒューズの隣には共に肩を組む、もう一人の男の姿もあった。

「……。ああ、あったよ。ヒューズも知らない間にな」

第九話 友（後書き）

はい、ノワールは墓碑の裏側にロイさんとヒューズ一家を掘ったんですね。

私にとってヒューズさんの最期はとても衝撃でした。

ロイさんと話しもせず、逝ってしまったのが悲しくて、今話にはヒューズさんの言葉を放り込んでみました。

みなさんの想像とは掛け離れていると思いますが、少しでも楽しめたのなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3544y/>

最後の人造人間

2011年12月17日00時53分発行